

NPO 住み良いまちづくりの清掃プログラムから派生したエピソード（1）

浜崎慶子

“環境保全という合言葉”－自分たちでできる一番身近なことは何かと皆で話しあい、出来るなら一カ月に1回くらいの割合で、JR 我孫子駅の南口の清掃を始めました。そこで少しずつ幸せの輪が広がってきています。

最初にお声掛けをして下さったのが、「我孫子の景観を育てる会」の伊藤紀久子様でした。彼女が会報「景観あびこ」の原稿の締め切りも近づき、「我孫子らしさ」とは何かを考えながら我孫子駅に降りたたれた時、南口の広場で清掃をしている私たちに目を留めてくださいました。私たちは「お掃除御苦労さまです」とか「ありがとうございます」と見知らぬ人から挨拶されて、とても幸福な気持ちで、お掃除していたので自然に、道を尋ねる人に応える声も明るくなり、

乳母車の若い母親になにげない励ましの声掛けもできました。その場面をご覧になった伊藤様が「他人にさりげない優しさを掛けられること、これぞまさしく『もてなしの心』即ち「我孫子らしさ」の一つになると良い」と感じられたので、この掃除プログラムに参加して下さることとなったのです。そこで拝読した「景観あびこ」の原稿は、非常に興味深いものでした。白樺派の文学を勉強することで、秋谷半七氏の言葉を借りると「手賀沼の持つ力一人の心を鎮め・慰め・ゆとりと勇気を与える力」が、現在を生きる住民たちをも鼓舞する力がある筈で、それを証明したいと望んでおられるのがわかったからです。

これはNPO住み良いまちづくり研究所の目指すものと一致する物があります。先ず『もてなしの心』については、現在NPO住み良いまちづくり研究所はWCI(ワールドキャンパスインターナショナル)というNPO法人の教育プログラムとタイアップして、毎春世界の若者たちを我孫子に招聘していますが、我孫子市民の『もてなしの心』を持って普段着姿の市民による草の根交流を行っています。まさに彼女は、無意識下で私達が当たり前の行為といていたことを、意識に上らせて下さいました。これが及ぼす作用は、伊藤様が考えていらっしゃるより将来、ずっと大きなものになると確信しています。

先ず浜崎に関して言えば、伊藤様が『再度「和解」・「友情」を読もうと思った』という言葉に触発されて、志賀直哉の「和解」を再度読み直しました。そこで得た事を簡単に述べます。

志賀直哉の「和解」ですが、高校時代には、単なる私小説として、粗筋のみを追い、親と次男との葛藤と位置付けていたのですが、今回読み直してもう少し日本の旧家という概念がわからないとこの和解の複雑さ、面白さが出てこないということに気付きました。すなわち祖父直道は、相馬藩の家令、中村藩の県知事、足尾銅山の開発などを行い、父直温も総武鉄道取締役、日本醋酸会社監

査役、帝国生命保険取締役など歴任、実業界で重きをなした人です。しかも長男直行が夭折していたので、父直温は、直哉に実質的な長男の役割を期待していました。しかし直哉は、足尾銅山鉍毒問題に刺激され、視察に行こうとして父と不和になる最初の契機を作り、自家の女中と結婚しようとして更に不和を高じさせ、康（さだ）との結婚で、父の家から自ら除籍されて、別に一家を創設しました。明治、大正のころの旧家の長男（あるいはその相当する男子）に対する期待はとても大きく、嫁も立派な家系の立派なお嬢さんという親の願をことごとく無視する直哉に対する直温の怒り、しかし除籍までは考えていなかったのに、勝手に家を飛び出した息子にどうやったら歩み寄りができるのか分からないまま、長い年月を過ごさねばならなかった不器用さゆえの孤独。直哉が、直温の孤独を理解する年になって初めて、自分から折れて出た和解が父親だけでなく、祖母や義母、兄弟、姉妹にとってどれほど大事な意味と価値をもったかが、再度の読み直しの中で、胸に沁みました。それは7年半手賀沼の辺で過ごしたが故の沼の持つ力の癒しに影響されたと、浜崎は考えたいと思います。

我孫子の後、新しき村を作り宮崎県の日向に出向き、その後埼玉県入間郡毛呂山（もろやま）町に東の村を作った武者小路実篤の「友情」は、また別の機会に読み直したいと思います。

清掃プログラムでの御縁から文学論を交わせるようになるのも、人生の面白さかなと思います。

以上